

# 低地地方における縮絨水車と 紡ぎ車の普及について

—技術変化と需要構造の関係の一側面—

永 沼 博 道

## I

経済史における技術の発展の研究は古くは専ら18世紀の産業革命ないしそれ以後が対象とされ、産業革命以前の技術は基本的に停滞的なものと見るか、あるいは産業革命の革命性を否定するが故に技術進歩を数世紀にわたって遡らせる見方のいずれかであった。中世における技術革新がそれ個有の意義を強く意識せられるようになったのは、C. M. Carus-Wilson の多分にジャーナリスティックな標題をもつ論文 “An Industrial Revolution of Thirteenth Century” が1941年に発表せられた後の事と思われる。この論文は13世紀イングランド毛織物工業における縮絨水車の利用のもつ意味を強調し、18世紀産業革命<sup>(1)</sup>にも比すべきものと見たのである。Carus-Wilson はこの中で、縮絨水車の導入にもとづく工場立地の移動がイングランド毛織物工業発達の決定因子であったと説く。縮絨水車は河川の水力エネルギーの利用であり、こ

---

(1) *Economic History Review* Vol. 11, (1941) pp. 39—60 この論文は付注を加えて論文集 *Medieval Merchant Venturers*, London, 1954, pp. 183—210 におさめられている。この論文集には女史のイングランド中世毛織物に関する三部作ともいうべき “The English Cloth Industry in the late twelfth and early thirteenth centuries” pp. 211—238, および “Trend in the export of English Woollens in the Fourteenth Century” pp. 239—264. があわせおさめられている。

のことは工場の立地を東部平原の都市から河川に恵まれた西部丘陵に移し、結果として都市の厳しいギルド規制を受けずに毛織物工業の自由な発展を農村地帯において許すことになり、このことは原料である羊毛の豊富さと結びついて14世紀以降のイングランド毛織物工業の急速な発達を説明する。他方フランドルは平地ゆえに縮絨水車の導入に不適であり、そのためにこの地では縮絨工程の機械化は遅れることとなったと説明する。この解釈は低地地方における縮絨水車の存在を示す史料の不足もあって、その後かなり広く受け入れられている。<sup>(2)</sup>

しかるに需要構造の展開を重視しようとする最近の研究は、縮絨水車の普及の差異を自然条件の違いに求める解釈に疑問を呈するに至っている。R. van Uytven は低地地方における縮絨水車の記録を掘り起すことによって、この地方の縮絨水車の普及の遅れを自然条件の不適性に求めずして、需要の違いから生ずる生産構造の差異にこの原因を求めんと試みている。即ち13、14世紀のフランドル毛織物工業は基本的に輸出向奢侈品工業であったことが製品の質の低下をもたらす恐れのある縮絨水車の導入を拒否したのである。van Uytven はこの結論を縮絨水車を使用せず16世紀に至るまで手や足による縮絨を続けていた都市工業の一方で、安価な大衆品を生産していた農村や地方の小都市の工業が積極的に縮絨水車を導入していたことを検証することによってひき出している。<sup>(3)</sup>

---

(2) 縮絨水車が低地地方で普及しなかった原因を自然条件の不適性および都市ギルドの制約にもとめる我国でも一般的に受け入れられているようである。例えば、角山栄、イギリス毛織物工業史論、ミネルヴァ書房、昭和35年、10頁。桂芳男「フリング・ミル利用の一般化過程に関する一考察」六甲台論集、第1巻、第4号、昭和39年、28頁。

(3) R. van Uytven "The Fulling Mill; Dynamic of the Revolution in industrial attitudes" *Acta Historiae Neerlandica*, Vol. 5 (1971) pp. 1—14. この論文は元来 "De Volmolen motor van de omwenteling in de industriële mentaliteit" *Alumini*, Vol. 38 (1968) pp. 61—71. として発表されたものの英訳である。

織物工業の歴史的展開にとって需要構造の変化がもたらした影響を重視しようとする傾向は近年ヨーロッパ経済史学界において顕著になってきている。このことは従来主として生産者の側から織物工業の歴史を見てきたことに對する反省から消費者の側面にも光をあてようとするものである。D. C. Coleman はこの観点から17世紀にイングランドで急速な発展をみた《New Draperies》に新しい解釈を与えている。以前もっぱら低地地方からの技術の伝播および輸出市場の地理的変更から説明されていたイングランドの《New Draperies》の発展について Coleman はイングランドに先立つ低地地方でのこの種の毛織物の生産と関連させつつ、15世紀以降の全ヨーロッパ的規模での需要構造の変化すなわち旧来の奢侈的毛織物にかわる低廉な大衆品への需要の拡大にその主たる原因を求め<sup>(4)</sup>る。M. F. Mazzaoui は12世紀から15世紀にかけての北イタリアにおける綿工業の発展についての最近の論文において、大衆需要を目的とした低価格の織物としての綿織物の意義を強調し、この期間における好みと需要構造の変化をこの工業の新展開をもたらした重要な原因とみな<sup>(5)</sup>している。

奢侈的織物から大衆品への転換の要因としては、1) 社会的分業、2) 庶民の所得の増大、3) ファッションの変更が考えられる。3) については既に C. M. Cipolla および B. E. Supple が16, 7世紀の地中海地方におけるファッションの変更を重視して<sup>(6)</sup>きた。また最近では P. Deyon が16, 7世紀における毛織物の国際競争に関する論文において、この時期における「移り気

---

(4) D. C. Coleman “An Innovation and its Diffusion: the 《New Draperies》” The Economic History Review, 2nd, ser, Vol. 22 No. 3 (1969) pp. 417—429  
拙稿「英国毛織物工業史における《New Draperies》の意義と性格」六甲台論集, 17巻3号（昭和45年）98—107頁は、この Coleman の立論に依りつつ《New Draperies》の発展を商品の質と需要の観点から吟味したものである。

(5) M. F. Mazzaoui “The Cotton Industry of Northern Italy in the Late Middle Age: 1150—1450” The Journal of Economic History Vol. 29 (1970) pp. 262—286.

なモードの役割の増大」に注目している<sup>(7)</sup>。J. Heers は「モードの変更は毛織物製造都市の社会経済史の決定的要素をなしていたように思われる」と主張し、13～15世紀のジェノヴァおよびその周辺山岳地帯における衣服の変遷を追っている<sup>(8)</sup>。他方、1), 2) による庶民需要の拡大については、なお実証研究を欠いており今後の研究をまたねばならない。

技術の変化と毛織物の質との関連については10年程以前、P. Váczy が11～13世紀のフランドルにおける水平型織機および縮絨水車の導入に関する論文において、紡ぎ車および縮絨水車は生産性を向上させる一方で製品の質の低下をもたらすものであり、このことが高級毛織物の生産に特化していたフランドル都市工業にこれらの新技術が受入れられなかった原因とみなしている<sup>(9)</sup>。

わが国では山瀬教授が以前から商品の奢侈品か大衆品かの性格の違いによる生産および流通の条件の差異に注目されていた以外、以上のような観点はほとんど無視されてきている。最近に至って米川教授がノーフォークのウー

(6) C. M. Cipolla "The Decline of Italy: The Case of a Fully Matured Economy" *The Economic History Review*, 2nd, series, Vol. 5 No. 2 (1952) pp. 172—186, B. E. Supple, *Commercial Crisis and Change in England 1600—1642*, Cambridge, 1959, pp. 136—162.

(7) P. Deyon "Le concurrence internationale dles manufactures lainieres aux XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècle" *Annales: Économies • Sociétés • Civilisations*, 27<sup>e</sup> année, no 1 (1972) pp. 20—32.

(8) J. Heers "Le mode et les marches des draps de laine : Gênes et la montagne a la fin du moyen âge" *Annales : Économies • Sociétés • Civilisations*, 26<sup>e</sup> année no 5 (1971) pp. 1093—1117.

(9) P. Váczy "La transformation de la technique et de l'organisation de l'industrie textile en Flandre aux XI<sup>e</sup>—XIII<sup>e</sup> siècle" *Studia Historica Academiae Scientiarum Hungariae* XLVIII pp. 3—26. この論文については山瀬善一教授の書評の形で詳細な紹介がある。国民経済雑誌, 第112巻第4号, 108—113頁。

(9) 山瀬善一, 「フランドルにおける初期の都市ブルジョワジー——アラスを中心として——」, 社会経済史学, 24巻5・6号 (1959) 84—85頁。

ステッド工業に関する論文においてこのことに言及している<sup>(10)</sup>。

以下では、以上に述べた観点に立脚しつつ、ある新技術の採用において当該工業が奢侈品工業であるか、大衆品工業であるかによって、どのような違いをもたらしたかを主としてフランドルにおける縮絨水車の導入の跡をおいしつつ吟味しようとするものである。あわせてほぼ同時代に一般化する紡ぎ車についても、同様の観点から見てみたい。

## II

縮絨水車のヨーロッパにおける最初の利用は10世紀末頃であろう。983年までにトスカナのセルキオ河（Serchio）に、1008年にはミラノの修道院の財産贈与目録が穀物用水車だけでなく縮絨水車とみられる *fullae* について言及している<sup>(11)</sup>。プロヴァンスでは1038年コロストル河（Colostre）、1040年にエスパニヨル河（Espagnole）、1046年シアニュ河（Siagne）で、いずれも修道会士達によって所有されていた記録があり、その後もこの地方の縮絨水車は地方毛織物業の発展とともに増大していく<sup>(12)</sup>。北西ヨーロッパにおいては1080年頃までにルーアンの近くのサン・ヴァンドリル（Saint Wandrille）の修道院<sup>(13)</sup>でその存在が知られている。イングランドでの縮絨水車の存在についての最初の記録は1185年のヨークシャーのコッツウォルド地方の神殿騎士修道会の領地においてみられる<sup>(14)</sup>。縮絨水車の技術は東欧にも伝播し、12世紀のうちに

---

(10) 米川伸一「ノーフォクのウステッド工業史」、一橋論叢、65巻6号（1971）734—735頁。

(11) L. White, *Medieval Technology and Social Change*, Oxford, 1962, p. 83.

(12) 山瀬善一、南フランスの中世社会・経済史研究、有斐閣、昭和43年、207頁。

(13) R. V. Lennard, "An Early Fulling mill" *Economic History Review*, Vol. 17 (1947) p. 150. L. White, *op. cit.*, p. 84.

(14) C. M. Carus-Wilson "An Industrial Revolution" p. 190.

ポーランドに現れ、1206年にはハンガリーに出現している。<sup>(15)</sup>

縮絨水車はそれ以前より使用せられていた穀物用水車の一つの応用と考えられる。穀物用水車は西ヨーロッパでは308～316年にアルルで使用されたのが最初とみられ、イングランドには8世紀頃伝わったものと考えられる。1086年にはイングランドで既に1,306以上の水車が使われていた。<sup>(16)</sup>水車こそは人類が、人間や動物の力ではない自然のエネルギーを機械的に利用した最初のものであった。

縮絨作業の機械化はまず二本の足が、人力で動かすカムにとりつけられた二本の木製ハンマーにとってかわることから始まった。ついでカムが水車で動く回転軸にとりつけられて水力が動力となる。この後縮絨工の仕事はもっぱら桶の中の毛織物がむらなく打たれるように注意することだけになった。生産性は飛躍的に増大し、作業は縮絨工の自宅ではなく水車をもった作業場で集中的におこなわれるように至った。<sup>(17)</sup>

12世紀末に最初の記録の存在するイングランドの縮絨水車は13世紀には急速にその数を増す。1208～9年のウィンチェスター（Winchester）の司教の財政記録は四つの縮絨水車を所有していたことを示している。同司教は1215年までにヴィルトシャーに一つ、1223年までにオックスフォードシャーに二つ、1224年までにサマーセットに一つ所有していた。バス（Bath）の司教は1293年ウスターシャーのキッターミンスター（Kidderminster）に縮絨水車

(15) W. Endrei “Changements dans la productivité de l'industrie lainière au moyen âge” *Annales : Économies · Sociétés · Civilisations*, 26<sup>e</sup> année no 6 (1971) p. 1298.

(16) B. H. Slicher van Bath, *Agrarian History of Western Europe A. D. 500—1850*, London, 1963, pp. 71—72. 速水融訳, 西ヨーロッパ農業発達史, 日本評論社, 昭和44年, 88頁。

(17) 縮絨水車は同時に多くの布を縮絨することによって単位時間当りの作業能率を上昇せしめただけでなく、作業時間を一日20～24時間に増加させ、一日当りの生産性の上昇は実に35～50倍にも達した。W. Endrei, *op. cit.*, p. 1298.

を所有していた。<sup>(18)</sup>縮絨水車の周囲には縮絨工達が住みつき、13世紀の中期以降これら職人の居留地がウェスト・ライディングの諸河川流域に形成されている。例えばカーヴァーレイ（Calverley）においては1257年頃少なくとも五つが見られる。<sup>(19)</sup>

イングランドにおける縮絨水車の普及の速さに比して、低地地方においては毛織物工業の繁栄にもかかわらず非常に遅れる。C. M. Carus-Wilson は既に述べた如く、この理由をこの地方が平地であって水車に適した落差のある河川を欠いていたことに求めたが、低地地方においても穀物製粉用水車は既に一般に使用されており、かつ南部低地地方には後に縮絨水車の急激な発展をみる丘陵地帯が存在する。相対的に言ってイングランドや北イタリアと比較するならば自然条件において不利ではあっても、これを決定的原因とみなすことは出来ない。既に述べたように、R. van Uytven は主に13、4世紀のブラバンに焦点をあてることによって、フランドル、ブラバン両地域の毛織物の種類による生産構造の差異に、この地帯の縮絨水車の普及の遅れの原因をみている。

低地地方においては縮絨水車は13世紀の経過中にその存在が認められる。縮絨水車（molendinum fullendi）はすでに1246年にルーヴェン（Louvain）に存在していた。1265年にはロートセラル（Rotselaar）のシトー会修道院が二つの水車を建設したが、その一つは縮絨用であり、他の一つは絞油用であった。1285年にプレモントレ会修道院がルーヴェンの近くに縮絨用水車と絞油用水車の建設に着手している。<sup>(20)</sup>1264年にはマーストリヒト（Maastricht）のミューズ河地区に、縮絨用と皮鞣しに用いるタンニンを抽出するための二つの部分をもつ水車が現われている。<sup>(21)</sup>13世紀末ルールモン（Roermond）、ユイ（Huy）にも縮絨水車がみられる。より南の地方ではナムール（Namur）

---

(18) C. M. Carus-Wilson "An Industrial Revolution" p. 191.

(19) Ibid., p. 204.

(20) R. van Uytven, op. cit., pp. 2—3.

とムーラン(Moulin)に伯の縮絨水車が建てられている。フロレフ (Florefe) のプレモントレ会修道院でも1284年に、またアルトワ伯も1278年に縮絨水車を所有していた。<sup>(22)</sup>

しかるにルーヴェン一帯の縮絨水車は14世紀の始めには姿を消してしまう。このブラバンからの縮絨水車の消滅はこの地方で生産される毛織物の質の転換によって説明されよう。元来ブラバンの毛織物はフランドルの毛織物に比して一般により低廉なものであったが、14世紀には高級な奢侈的毛織物の生産に移行する。フランドルの衰退とブラバンの上昇は直接にはフィリップ四世治下のフランスとフランドルとの政治的緊張である。フィリップ四世はフランドル諸都市に対抗してブラバンの毛織物商人を育成した。<sup>(23)</sup> 他方シャンパーニュ伯領が1284年来フランス王の支配下に入って重要な販売市場であったシャンパーニュの祭市との関係が途絶したことが、イングランドが自国毛織物工業の保護育成のため輸出される羊毛に高関税を課し、かつフランドルへの輸出をしばしば制限したことがフランドル毛織物工業に大きな困難をもたらしていた。加えて都市内部におけるパトリシアと同職組合の間の社会闘争の激化があった。これらの事情が13世紀まではそれほど重要性をもっていなかったブラバンの都市工業に有利に働いた。

今やフランドルにかわって奢侈的毛織物の主産地となったブラバンの諸都市にとって縮絨水車の使用は毛織物の質の低下を招来するものとして拒否された。1298年ルーヴェンの毛織物業者の同職組合は、親方縮絨工が委託者の同意なしに毛織物を縮絨水車で縮絨することを禁止している。<sup>(24)</sup> 毛織物業者や

(21) Ibid., p. 3. 12世紀から13世紀にかけて水車は製粉、縮絨のみならず多方面にわたって動力として使用されるようになった。例えば砂糖精製、製材、タンニン採取等に利用された。W. Endrei., *L'évolution du techniques des filage et du tissage: du moyen âge à la révolution industrielle*, Paris, 1968, p. 150.

(22) R. van Uytven, op. cit., p. 3.

(23) Ibid., pp. 3—4.

(24) Ibid., p. 5.



毛織物商人は縮絨水車を利用することによって生産性を上昇させ、安価な製品を大量に販売するよりも、少量の高級品の販売によって単位当りの高利潤を望んだのである。

フランドルやブラバンの都市において縮絨水車が利用されていなかった14、5世紀においても農村地帯や小都市においては依然として使用され続け、むしろ増大の傾向さえ示している。1365年にはリエージュ（Liège）の毛織物業者組合が縮絨水車を購入している。1367年、1399年にはユイに新しく縮絨水車が建設された。1383年までサン・トロン（Saint-Trond）が加わり、1413年までにヴェルヴィエ（Verviers）には四台の縮絨水車が存在した。アルトワにおいてはエデン（Hesdin）、エール（Aire）、サン・ポール（Saint-Pol）等に縮絨水車の存在が認められる。<sup>(25)</sup>

低地地方の縮絨水車は決して消え去ってしまったわけではない。フランドル、ブラバンにおける縮絨水車の数は15世紀の間に急速にその数を増す。特にミューズ河、ウェードル（Wesdre）河流域の発展がめざましい。ナムール、マーストリヒト、ユイ、リエージュ、サン・トロンに加えて新たにマーストリヒトに二台、ルールモントに二台が建設されている。フランシモン<sup>(26)</sup>（Franchimont）侯領は1530年までに17台の縮絨水車を所有していた。この地域はフランドルやブラバンの都市の影響力の範囲外にあり、かつアーヘンを経由してライン地方と結びついていたことが農村工業をこの地に発達させたものと考えられる。都市工業における厳しいギルド規制を受けることのない農村工業は急速に増大する大衆品需要によく対応することが出来た。都市工業が良質のイングランド産羊毛の使用を強制したのに対し、農村工業はフランドル産あるいはイスパニア産の羊毛を使用した。生産工程においても簡略化がなされ、縮絨水車の利用はその一例である。一方、都市においては縮絨水車の導入は同職組合の強い抵抗を受けた。

(25) Ibid., p. 6.

(26) Ibid., p. 7.

しかしながら強い抵抗にもかかわらず新しい状況は都市をもその影響下に巻き込んでいく。織物業者は稼働資本の恒常的な回転を確保するために奢侈品の生産から大量販売へと移っていく。1543年はニノーヴ (Ninove) とイーブルに、16世紀中にハーセルト (Hasselt), クール (Lille), メーネン (Meenen), コメン (Komen), ウェルヴィク (Wervicq) およびブルージュ<sup>(27)</sup>にも縮絨水車が採用され、さらに南西フランドルにまで普及していった。

縮絨水車の利用の急速な展開は1564年のサン・ジャンカペル (St. Janscappel)<sup>(28)</sup>における風車の利用にまで進んだ。宗教戦争の結果は南低地地方から北低地地方への移民をもたらし、縮絨水車の技術はこれら移民とともにライデン、ロッテルダム等に普及していった。ここでは風車が広く利用された。

### III

紡ぎ車はオリент起源のものであり、最初は綿糸用としてヨーロッパに導入された。麻と綿の混織であるファスチアン (バルヘント織物) はシャンパーニュでは1179年以後、フランドルでは1252年以後生産されている。紡ぎ車は北フランスへはファスチアン生産業者によってもたらされた。ついで紡ぎ車は羊毛、大麻、亜麻工業にも用いられるに至った。紡ぎ車は古代以来使用され続けてきた「つむ」に比べて少なくとも2倍の生産性をあげることが可能であった。

「つむ」は一本の端にはずみ車をつけ、はずみ車のついている方の端に鉤をつけるか、溝を掘ったものであり、この形は古代から中世を通じて変化し

---

(27) Ibid., p. 9.

(28) Ibid., p. 9. 北西ヨーロッパにおける風車の出現は遅く、低地地方では1274年に製粉用に使われたのが最初の記録である。沼沢の排水のための風車は1430年に始めて現われ、これが一般化するのには1600年頃である。C. Singer, E. J. Holmyard, A. R. Hall (ed) History of Technology, Vol. II p. 620.

ていない。紡ぎ手は片手で撚りをかけながら「つむ」に巻きとっていくのである。<sup>(29)</sup> 紡ぎ車は糸巻作業をベルトによる伝導装置によって大きな車輪の回転を紡錘に伝えて半機械化することになった。しかし撚りは依然として紡ぎ手の仕事であった。撚りも同時にかけられるようになるのは15世紀にフライヤー付紡ぎ車が発明されてからである。

しかし、いかに早く作業が出来たとはいえ、紡ぎ車はそれが発明されるとすぐに「つむ」にとってかわったわけではなかった。都市の商人ギルドは紡ぎ車の使用が繊維の質の低下をもたらし、しいてはその都市の毛織物の市場における名声を傷つけるものとしてその使用に強く反対した。早くも1298年には、シュパイエル（Speyer）の毛織物商人のギルドは縦糸を紡ぎ車で紡ぐことを禁止している。<sup>(30)</sup> フレンツェでは紡ぎ車は15世紀に至るまで横糸の生産にのみ使用され続けられた。<sup>(31)</sup> 紡ぎ車は13世紀の始めに北フランスに現われ、14世紀までにイングランド、ドイツ、オーストリアで、15世紀にはハンガリーでも用いられるようになっていく。<sup>(32)</sup> しかし織物の質と美しさを尊重した地域では紡ぎ車の使用は強く制限されていた。フランドルにおいては「つむ」の方がより丈夫で上質の繊維を紡ぐと考えられて、紡ぎ車よりも「つむ」が依然としてよく用いられた。<sup>(33)</sup> 都市の毛織物業者は何よりも輸出上の名声をまず第一に考えていた。

最初のうちは撚糸作業と糸巻作業は別々におこなわれていたが、フライヤー付紡ぎ車が出現するにおよんで、この二つの作業は同時並行的になされるようになった。この新しい改良型の紡ぎ車は1480年頃から現われ始める。これは紡錘のまわりを回転するU字型のフライヤーをとりつけ、回転数の違い

(29) W. Endrei, *L'évolution des techniques* pp. 53—55.

(30) *History of Technology* II p. 201.

(31) P. Váczy, *op. cit.*, p. 17. W. Endrei, *L'évolution des techniques* p.55.

(32) P. Váczy, *op. cit.*, p. 17.

(33) W. Endrei, “Changements dans la productivité” p. 1293.

によってフライヤーが一回転するごとに一回撚りがかかるようにしたものである。<sup>(34)</sup>

#### IV

北西ヨーロッパにおけるこのような新技術の出現は、まさにフランドル都市毛織物工業の繁栄の時期であった。フランドルはライン地方やシャンパーニュと結びついた地の利を生かして、当時西ヨーロッパの工業センターとしての地位を築いていた。12世紀から13世紀にかけて栄えたシャンパーニュの祭市で取引された商品のなかで最も重要なものはフランドル産の毛織物である。フランドル産の毛織物はこの市場で高品質の織物として知られイタリア商人のもちこむ東洋産の香料や絹織物と交換された。この国際商業のための組織的な毛織物の生産がフランドルで展開されるようになるのは11世紀以降のことであった。カロリング時代からフランドルは毛織物の産地として知られていて各地に輸出されていたが、当時は上流階級の着用する奢侈的織物はいっぱい絹と麻であり、このフランドル産の毛織物も主として地方的需要に<sup>(35)</sup>応ずるものであったと思われる。

外国市場への輸出を目的とした奢侈品工業としての生産がおこなわれるには、毛織物が麻織物や絹織物とならぶ上質織物としてその価値が認められるのを待たねばならなかった。

北西ヨーロッパへの縮絨水車の導入の時期は、まさにこのフランドル毛織物工業の最盛期にあった。奢侈的毛織物の生産に特化していたフランドル諸都市においては、縮絨水車の利用は製品の品質を貶しめ、ひいては輝しき都市の名声を傷つけるものと考えられた。紡ぎ車の使用に対する拒絶もまた同

---

(34) P. Váczy, op. cit., pp. 17—18.

(35) L. White, op. cit., p. 119. P. Váczy op. cit., p. 9.

じ理由によるものであろう。この時期のフランドルにおいては生産性の向上よりも、品質の維持に何よりも腐心していた。この同じ時期に他方でブラバンに縮絨水車が導入されたのは、ブラバンの毛織物工業が国際市場において未ださほどの重要性をもたず、その品質においてもフランドル産に劣っていたが故と考えられる。しかるに14世紀に入りフランドル工業が既に述べた事情により衰退し、他方でブラバン産の毛織物の地位が上昇するとともに、この地から縮絨水車が姿を消す。14世紀のブリュッセルの毛織物は王侯貴族の着用する非常に高級な毛織物として知られ、ブリュッセル程ではなかったものの同じような傾向はブラバンの他の重要な毛織物工業都市ルーヴェン、メクレン<sup>(36)</sup>においてもみられる。まさにこのような質的転換こそが既に存在していた縮絨水車のその後の消滅を招いたものであろう。

縮絨水車が12世紀に導入され、14世紀には急激な増大をみせるイングランドにおいても、古くからの毛織物生産地であった東部諸都市においては縮絨水車の利用が厳しく拒否された。1298年ロンドンにおいて、毛織物が市外に持ち出されて水車で縮絨されることにより縮絨委託者に重大な損害が与えられているとの苦情が国王に対して出されている。<sup>(37)</sup>13世紀には良質毛織物が生産に特化していた東部平野地帯の都市から、14世紀以降西部溪谷地帯に毛織物生産の重心が移るが、これはフランドル工業の衰退と期を一にしており、奢侈的毛織物から中級毛織物への質的転換の第一歩を記すものである。自国毛織物工業の育成を計ったエドワードⅡ世、エドワードⅢ世治下、イングランド王室の購入する毛織物の産地はなおフランドル、ついで1330年以後はもっぱらブラバン、特にブリュッセル、メクレン産の毛織物であった。<sup>(38)</sup>

後世におけるイングランド産毛織物の国際市場での優位性は何よりも原料である羊毛が豊富に国内に存在していたことによる価格面での競争力の強さ

(36) R. van Uytuen, op. cit., p. 4.

(37) C. M. Cares-Wilson "An Industrial Revolution" p. 203.

(38) C. M. Cares-Wilson "Trend in the export of English Woollens" p. 243.

にあった。これは後にヨーロッパ市場における中級毛織物への需要の拡大はイングランド産毛織物の優位性を決定的なものとした。

中世は元来身分制社会であり、階層間の差異が社会的に固定されていた時代であった。この時代においては衣服の質および色彩の差異は身分上の差異を示す対象として用いられた。緋色の毛織物は王侯、貴族、聖職者等の上層身分の構成員によってもっぱら消費せられたのに対し、庶民の用いていたものは白色、灰色、青色等であった。また上質の毛織物の産地は限られており<sup>(39)</sup> フランドル、後にはブラバンがもっぱらその産地であった。他方、庶民の着用する劣質毛織物は消費地の近隣で急速にその生産を拡大していく。これら二種類の織物はその市場の構成も流通形態もまったく異にしていた。一例を高地プロヴァンスの小さな村リエズ（Riez）にとってみよう。リエズには1419～1423年の4年間に33の異なる生産地から計300反の毛織物が500人の購買者に販売されているが、外国産の毛織物は毛織物商人自身の店で売られたのに対し、同じ高地プロヴァンスのセヌ（Seyne）附近の村々で織られた粗悪品は木材等と一緒にバザールで販売されたのである。上質毛織物とその他の織物とは顧客をまったく異にしていた。一方は司教、司教座聖堂参事会員、周辺の領主達、リエズの商人達であり、他方は農民であった。<sup>(40)</sup>

14世紀以降、地中海諸地方は、イングランド産毛織物の優越と北イタリア諸地方の生産の拡大、これに反してフランドル産、ブラバン産の毛織物の相対的後退によって特徴づけられる。これとともに綿織物や亜麻織物の生産、消費の拡大もみられる。フランドルでは15世紀以降リー河流域で新種の軽い毛織物《nouvelle draperies》の生産が拡大し、粗悪で耐久性には欠けているものの安価で大衆の需要に対応した製品が国際商品としての地位を確立しつつあった。<sup>(41)</sup>

(39) J. Heers, op. cit., p. 1112.

(40) Ibid., p. 1111.

(41) 山瀬善一「フランドルにおける都市ブルジョワジー」82頁。

東欧においても13世紀から15世紀にかけて上質毛織物が漸次減少傾向にあり、かわって劣質毛織物の増大傾向がみられる。A. Nahlik の考古学上の発掘に基づく研究によると、オポレ (Opole)、クダンスク (Gdansk)、ノヴゴロド (Novgorod) では  $1\text{ cm}^2$  当りの繊維の数が縦糸16以上、横糸13以上の上質毛織物が減少傾向にあり、かわって縦糸15以下、横糸12以下の劣質毛織物の増大現象がみられる。フランドルからノヴゴロドに輸出されていた毛織物も12、3世紀には上質のものと劣質のものが数量的に相なかばしていたものの、14、5世紀には劣質毛織物の数が急増し、上質のものは少量しか輸出された形跡がない。<sup>(42)</sup>

12世紀以降、大衆需要向の毛織物は一貫して増加傾向にあった。一方、奢侈的毛織物の生産は13世紀のフランドル、14世紀のブラバンを頂点に衰退していく、毛織物工業における新技術の採用と一般化はこの時期であり、それらは奢侈的商品を生産していた古くからの毛織物生産都市ではなくて、むしろ地方の小さな工業センターや農村地帯においてその普及をみたのであった。このことは縮絨水車や紡ぎ車の如き新技術の採用が、劣質な原料の使用、未熟練ではあるが安価な農村の労働力の使用と不可分の関係にあったことを示している。かような生産の質的変更をもたらしたものは前述した如く奢侈品需要の後退と大衆品需要の拡大という需要構造の変化であった。

前に大衆品需要の拡大をもたらす三つの要因を掲げた。この中で、ファッ

---

(42) A. Nahlik, "Les techniques de l'industrie en europe orientale du X<sup>e</sup> an XV<sup>e</sup> siècle; à travers les vestiges de tissus" *Annales:Économies • Sociétés • Civilisations*, 26<sup>e</sup> année no 6, 1971, p. 1281. 中世のラシャ織にあつては繊維の密度の高低で質の上下が決定された。すなわち織目がつまっているものが上質であり、目の粗いものが劣質であった。従つてこの時期においては薄手毛織物とは一般的に粗質の毛織物のことを指し劣質毛織物と同義的な意味を有していた。なお Nahlik は縦糸22以上横糸15以上のものを最上級品、縦糸16～22横糸13～15のものを上級品、縦糸10～15横糸8～12のものを中級品、縦糸横糸ともに10以下のものを大衆品と分類している。

ションの変更はともかくとして他の二つについては今後の吟味を待たねばならない。社会的分業の拡大によって自給自足的傾向の強いこれまでの経済が漸次的に崩壊に進みつつあったことは、一般的には結論しうるが、大衆品需要の拡大との直接的関連を証明するには十分な実証的研究を踏まえなければならない。また、庶民階層の所得水準の推移についても同じことがいえるが、ただ次のことは推定されうるであろう。中世末期の社会変化、なかんづく黒花病以後の地代の暴落と賃金水準の高騰にともなう所得の再分配が工業製品の需要構造に著しく影響を与えたことである。<sup>(43)</sup>

- 
- (43) 市場構造のこのような変化の原因として Aymard が次の諸要因を挙げていることを指摘しておこう。1. 地代の暴落, 2. 農産物価格の下落による都市の報給生活者の生活水準の上昇, 3. 農村の報給生活者の生活水準の上昇, 領主の徴税の低下によって価格の低下を相殺された農業生産者の生活水準の向上である。M. Aymard, "Production, commerce et consommation des draps de laine du XII<sup>e</sup> an XVII<sup>e</sup> siècle (Prato, 10—16 avril 1970) "Revue Historique 95<sup>e</sup>année, Tome 246, 1971. Slicher van Bath の計算によっても人口減少の最も著しかった15世紀前半の実質賃金指数は13世紀に比して農業労働者で約1.6倍、大工で約2倍の上昇を示している。B. H. Slicher van Bath, op. cit., p. 103, 邦訳130頁。